



寺口麻穂
**ドギー
パラダイス!**
犬と人間の快適な生活

第30回

日本の犬事情③
日米の懸け橋編

在米24年。かつては人間の専門家を目指し文化人類学を専攻。2001年からキャリアを変え、子供の頃からの夢であった「犬の専門家」に転身。地元のアニマル・シェルターでアダプション・カウンセリングやトレーニングに関わると共に、個人ではDoggie Project (www.doggieproject.com) というビジネスを設立。犬のトレーニングや問題行動解決サービスを提供している。愛犬ジュリエットが「他界した今は、ニューヨークに移転して活躍中。ご意見・ご感想は：info@doggieproject.com



てらくちまほ

**近くなった
日本とアメリカ**

以前に紹介した大阪・能勢のARKも別の日に訪問した動物愛護施設も、家を失くした犬たちで常時溢れていて、ホームレス犬撲滅への道のりが長いことを実感しました。動物愛護活動に関わると、人間の邪悪で汚い部分を見ずにはいられず、人間嫌いにもなります。反対に、本当に美しく尊い人と人の縁、人と動物の絆にも出逢えます。私は今回の日本視察を第一歩として、横のつながりをうんと太くし、日米の懸け橋として動物愛護活動の交流を活発にしていきたいという野望を持っています。そんな意味でも、里帰り様々な「犬の味方」に出会えたことに大満足しています。施設訪問の際に、FM COCOLOのパーツナリティー・中村清美さんが同行してくれました。これは、清美さんが福島県の被災動物救助についてマンハッタンに講演に来たのがきっかけです。

日本の現状とこれから

日本の犬事情、3度目の今回はその締めくくりとして「日米の懸け橋」と題し、これからの日本の動物愛護において、アメリカに住む私たちができることについて考えてみたいと思います。

今年の里帰りに際し、私は動物愛護活動に従事する者の視点から日本の犬事情を観察しましたが、全体的にペットに対する考え方や扱いがアメリカに比べて数十年は遅れているという印象を受けました。アメリカにもまだまだ改善すべき点は山ほどあります。でも、日本がまず一日も早くアメリカレベルに達しないと、二人三脚で前進することもできません。

例えば、日本の犬たちの去勢・不妊率はかなり遅れている様子。町で見かけるオス犬たちはほとん

どが大きな玉をぶら下げて歩いています。メス犬の不妊手術率は遠目からでは分かりませんが、オスより手術費が割高なため手術率はもつと低いのでは? 「ご近所の犬に子犬が生まれてもらった」などという発言をよく耳にしたので、今なお一般家庭での繁殖(意図的や商用目的でなく)が頻繁にあるのでしょうか。そうして生まれた子犬のうち、どれだけが保健所行きになり殺処分となっていることか……。日本の飼い主の間では未去勢・不妊が引き起こす結果への意識が薄く、手術への抵抗が強いことを感じました。

また巷の飼い犬たちの多くがベツトストアで購入された犬(大量生産された「パピーミル」犬)のようで、私の両親の「犬友だち」の愛犬もほとんどそうです。母は周りの愛犬家がどれほど莫大な医療費を費やしたかや、その甲斐もなく飼い犬に早死にされた話を色々聞かせてくれました。また、「簡単な収入」目当てに知識も準備もない人が狭い家でブリーダーと化し、近所からの苦情や営業停止処分を受けた結果、犬放棄問題を起こしているとも聞きました。

日本にも愛犬家が大変多いのはとても嬉しいことですが、責任感ある飼い主になるための情報や動物愛護活動についての教育が一般の人にまだまだ行き渡っていないことを痛感しました。

清美さんからは、先日大阪で行われた「動物愛護管理法改正シンポジウム」(主催THEペット法塾)の貴重な資料もいただきました。フェースブック上での情報交換も盛んになり、環境省への動物愛護のパブリックコメントに、アメリカからも多くの人が貴重な意見を届けています。動物愛護では少し先を走っているアメリカから発信できる情報や画期的なアイデアは色々あると思います。ネット上で簡単に情報収集やメール交換ができる今、同じ目的で一生懸命頑張っている同志ならいっそう簡単につながる事ができるでしょう。そして、それが動物たちに大きな利益をもたらすはずだと信じています。

今回は、アメリカのアニマル・シェルターについてお話しします。実際にボランティアでもしないとなかなか仕組みが把握しにくいもの。家をなくした動物が新しい家を見つけるまでの流れを通して、システムを紹介いたします。どうぞお楽しみに。



大阪で行われた「動物愛護管理法改正シンポジウム」